

津波忌（二）

松浦 敬親

私は、新季語「津波忌」を俳誌『麻』（主宰・嶋田麻紀）で提唱。しかし、意外にも論争になりました。昨年（二〇一三年）の『麻』三月号にそれが出ています。

私はその中で、こう非難されました。「新季語としての津波忌は、あまりにも身勝手な造語と言わざるを得ないと思います。もったきついことを言わせていただくなれば、津波に遭っていない人間が、津波忌などと言う造語を使って、安易に俳句を作るとすれば、今回の津波で大切な肉親を亡くされたご遺族や亡くなった方、大事な財産を一瞬にして失った方々に対する冒瀆と思います」と。

①津波忌やビルほどの鮫夢に出て 敬親

私は「津波に遭っていない人間」ですが、「安易に」この句を作った訳ではありません。安易に「津波忌」を造語した訳でも、被災者を「冒瀆」するためにそうした訳でもありません。自他共にその季語を必要としていると感じたから、そうしたのです。

実は、私は少年時代に、船が沈没して渦に巻き込まれる悪夢によく襲われました。幼稚園の時に左肱を複雑骨折し、船で豊後水道を渡って別府（名医が居た）まで通院した体験があり、その時の苦痛がトラウマ（精神的外傷）になっていたからです。しかも、私には水泳中に餓鬼大将におぼれさせられそうになった体験もあります。それで、大津波に過剰に反応して、①となったのです。

私は、①に実存的な不安と同時に、それが「ビルほどの鯨」となって出現したことに滑稽さも感じていました。なのに、それを「冒涇」と決めつけられ、表現の自由を奪う形で全否定されたのです。彼は文学がわかってないな、と私は思いました。

②本能は巨大津波を待ちながら つぎお

これは、私の反論に賛同した外部の人物からの手紙にあった句です。季語はありませんが、「巨大津波」に季語以上の重さがあります。「わが本音」で、「タナトスの瞬間を書いた」とのことでした。タナトスは死の本能。フロイトは、人は生の本能（エロス）と対立して、生得的に死（破壊）への本能（衝動）を持つと考えました。②も津波体験者の句ではありませんが、私は、津波体験者の凡俗の句よりも②に文学を感じます。

③繙帯を巻かれ巨大な兵となる 白泉

これは、「戦火想望俳句」（内地にあって前線を想い描いた戦争俳句）として弾圧された人の有名な作品です。弾圧の理由は、「前線の兵士を冒涇する」というものでした。何やら、①を非難した人の言い分と似ていますね。その辺は、次回で。

（次号につづく）